

巻頭言

「品質データの改ざん」

理事長 新谷 友良

このところ、神戸製鋼をはじめとして三菱マテリアル・東レなど立て続けに製品の品質データ改ざん問題が起きています。そして、今度はKYBや川金子会社の耐震・免震装置（ダンパー）が問題になりました。建物や装置などさまざまなところに使用されている素材・製品の品質を偽る事件で、社会の安全・安心を損なうもの、日本企業の国際的な信用を失墜するものとして、厳しい批判が巻き起こっています。そして、問題の背景としては、社会の安全・安心を求める基準や規格が厳しくなっていること、納期や価格に対する競争が激しくなっていることが指摘されています。

私は40年近い会社生活のほとんどをモノづくりに関係した部署で過ごしました。技術者は、客先の求める品質・納期・価格を満足するものを求めて、最適な設計をするよう努力していました。現場の製造・品質管理に従事する人たちは技術部門の作った製造仕様を満足すべく、ここまで細かく注意を払って製品を作るのか、と身内が感心するような丁寧さで製品を作っていました。出荷された製品が、そのあと社会のさまざまところで使用される場面を想像すると、技術部門の出した製品仕様、品質管理部門が決めた品質基準を偽って出荷するなど私には想像できません。耐震・免震装置の品質不良で起きる建物の倒壊や死傷事故を想像すれば、不良品の出荷は物を作る人にとっては耐え難いことと思います。

ある記事は「品質データを改ざんするに当たっては、それなりの社内ルールがあり、超えてはいけないう線を守っていたようだ。改ざんマニュアルがあり、納入先や実測データなどをエクセルファイルで管理する事実上のマニュアルが今回の調査で見つかった」と書いています。これが事実とすると、一連の問題には、製造現場のデータ改ざんを超えて、客先の求める品質・納期・価格とそれに応えるメーカーの製品仕様・品質基準とが、双方が本当に納得しあったものでなかったのではないかという疑問を感じます。

ビジネスの世界は顧客第一、安く・早く・より良い品質の製品を納めることが最高の善とされますが、安く・早く・より良い品質はバランスがとれていなければなりません。そしてバランスをとる努力は顧客と製品を作る側双方に求められます。出荷品質を偽ったメーカーの責任は何より重いものですが、早く・安く・より良いものを求める顧客と、それに応えるメーカーの共通善・公共善を求める努力が、今求められている気がします。